令和元年度第１回南砺市福野地域審議会会議録

1　開催日時　　令和元年９月２４日(火)午後６時３０分から８時まで

2　開催場所　　南砺市福野庁舎 (２階) 　講堂

3 出席委員　　１４名

 　　　　　　田原清則、岩崎弥一、西賢一郎、澤田清治、山口幸夫、土原久美子、長谷川正昭、

　　　　　　　中野ミチ子、中村義章、大橋隆樹、堀元栄信、前田美好、水木猛、仲村朋子

4　欠席委員　　１名　大藏博子

5 市出席者　　田中市長、上口市長政策部長、柴市長政策部担当部長、川森市民協働部長、荒木市民

 　　　　　　協働部担当部長、市川南砺でくらしません課長、石﨑行革・施設管理課長、竹中地方

 　　　　　　創生推進課長、長岡総務課長、大橋福野行政センター長、亀田地方創生推進係長、西

 　　　　　　井秘書係長、勇﨑協働のまちづくり係長、中島行革推進係長、横川人事係長、武島福野

 　　　　　　行政センター次長、影近協働のまちづくり係主事、窪福野行政センター主事、大楠福

 　　　　　　野行政センター主事

6　傍聴者　 　 なし

7　議　題　　　（１）南砺市総合計画　将来像について

8　その他　　　（１）庁舎統合に伴う各課の移転スケジュールについて

　　　　　　　（２）市が事務局を担っている各種団体事務の方向性について

　　　　　　　（３）令和２年度からの組織機構改革について

9 会議経過

○開会

事務局（センター長）から開会の宣言を行う。

○委嘱書の交付

新委員に対し委嘱書を交付。

○会長挨拶

澤田会長

○市長挨拶

田中市長

○協議議題

澤田会長が進行しながら順次議事を進める。

**（１）南砺市総合計画　将来像について**

竹中地方創生推進課長から資料に基づき説明

（会長）

これより意見交換及び質疑を行う。挙手の上団体名・氏名を述べ、議長の指名で発言をしていただく。

（A委員）

資料の２頁にある計画策定に向けての基本的な考え方についてもう少し具体的に説明をお願いしたい。これには４つの項目があるが、この基本的な考え方について具体的に説明していただきたい。

（竹中課長）

（１）の「まちづくりの主体は市民」は、計画策定の基本はビジョン／将来像をしっかりと定めて、今何をすべきかということを具体的に行政計画で謳っていくことにある。その為には、将来像は行政側だけで作るものではなく、市民と共感できるまちの姿を、市民とともに作り上げていかなければならない。そのため第二次南砺市総合計画については、行政主体の計画ではなく市民と一緒に、市民目線で総合計画を作成したいと考えている。

（２）の「分かりやすく実効性の高い計画」は地方創生の観点からこれからの１０年間戦略的に取り組むことを重点事項として実効性の高い計画を、第二次総合計画に盛り込んでいきたいと考えている。具体的には資料１にあるように、「目指すべきまちの姿」というものが目的ならば、その目的を達成するための手段としての目標を設定する。或いは、この目標を達成するために手段としてやるべきことは何かということを、目的と手段の論理的なつながりを考えながら、計画を横軸で繋げていくようにしたいと考えている。

（３）の「段階的にゴールとなる指標を設定」は、市民と行政が目標達成に向けて今現在の進捗をその都度しっかりと確認できる、目標を明確にした第二次総合計画に基づく事業を進めていきたいと記載している。

（４）の「PDCAサイクルにより常に見直す」は、計画を作ること自体がゴールではなく、計画を実行していく中でどこに問題点があるのか、どうすれば改善できるのか、PDCAサイクルをしっかりと回していくことにより、実効性の高い計画を今後取り組んでいきたいと考えている。

また将来像についてはこれまで５回の市民会議、ワークショップを通じて市民の方から得られた様々な意見を基にこのような形に纏めた。

（A委員）

詳しい説明をいただいたが、やはり資料の上でもう少し分かりやすく説明してもらいたい。また、資料５～７頁のパブリックコメント中には色々な意見があり、出来上がった計画を見せるだけでなく、こういった方々の意見も募らないといけないのではないか。

南砺市の将来像については３万人都市を想定しているとあるが、人口は更にそれを下回るという意見もある。そういった将来像について現時点では分からない点もあると思うが、計画期間を３年や５年に短縮して、より分かりやすい計画にしていただきたい。団塊の世代が高齢者となっていることもあり、より具体的な一般の方が理解できるような書き方をしてもらえないか。

市民主体というならば、地域審議会やパブリックコメントだけでなく、もっと色々な場所で説明会を行って意見を募ればいいと思う。第二次計画となると、南砺市のことだけではなく、第二次の合併、あるいは砺波広域圏の合併や、呉西６市の合併等を見据えたビジョンがないと、皆さんに理解してもらえないと思う。他の地域、例えば小矢部市や砺波市の状況についても考えてもらいたい。例えば高岡のイオンは非常に魅力があると言われているが、南砺市は広いばかりでどこに魅力があるのか、福野地域においてもどこに魅力があるのか明瞭でない。世界遺産なども重要だが、地域としてあるべき姿を行政に見つめていただきたい。統合庁舎になると益々行政が地域から離れていくように感じるので、ビジョンはビジョンとして、１０年間の計画は先程言われたように４項目でよろしいと思うが、地域審議会の意見も取り入れてもらいたいと思う。

（竹中課長）

市民の方からご意見をいただくというのは今回の地域審議会で終わりではなく、今後移住者・転入者を対象とした未来ミーティングという市長との意見交換会を予定している。これは一次定住者を対象としたものだが、７月には高校生を対象とした未来ミーティングも行っており、将来こんな南砺市になってほしいというアイディアを高校生の皆さんからいただいている。また来月には、ローカルサミットNEXT in南砺という、全国のまちづくりに長けた方が南砺市の将来について熱く語ってもらうシンポジウムを予定している。それらの中で出された意見もしっかりと受け止めながら、総合計画に反映していく。

また、広域的な他市町村との関係については、県西部の６市がまとまって呉西圏域として経済成長の発展に向けて様々な事業に取り組んでいる。１年２年、あるいは３年ですぐに成果が現れるもの、そうでないもの、色々とあるが、しっかりと他の自治体、あるいは国・県と連携をとりながら南砺市として進むべき方向性を定めていく。

（B委員）

パブリックコメントにもあるが、第一次総合計画についてまず総括し、それに基づいて第二次総合計画策定を行うべきだと思う。勿論、市当局では総括をしていると思うが、それについての資料等が我々に示されていない。何が上手くいって、何が上手くいかなかったのか。何が必要で、何が必要でなかったのか。これから様々な課題のある南砺市をどこにもっていくのか、本当に真剣に議論するには、やはりそのような資料を出して「可視化」するのが重要ではないか。A委員が述べたように、我々のようなある程度年をとった者だけではなく、南砺市の未来が一番自分たちの未来に直結する、３０代や２０代の意見をもっと聞く。高校生の意見も聞いているということだが、自分たちが高校生の時にそれだけ責任を持ってこういう議論に参加できるような意見をもっていただろうか。今ベンチャー企業で非常に大成功しているような人たちは３０代の方が多いと聞いている。そのようなもう少し若い世代の人たちの将来に向けての思いを聞く場があれば良いと思う。以上の点についてどのように考えているか伺いたい。

（竹中課長）

まず、１点目の第一次総合計画の総括については、第二次総合計画が総合戦略と合わさった形となっている。そのため第一次総合計画については今月の進捗を区切りとしてこれまでの成果をとりまとめ、１１月までには資料も含めて成果数値として示しながら評価を行っていく。従って、B委員の言われるとおり次の計画を行うにあたって前の計画の検証は必ず行われなければならないが、今回に限ってはまだその段階に至っていないので、ご了承いただきたい。

２点目として、２０代３０代の意見という部分について、先程も説明したこのビジョン案をとりまとめるにあたり、市民会議というものを５回開催している。その中で、市民会議に参加していただいたのは２５名の委員だが、そのほとんどが２０代から４０代前半の方である。勿論、５０代６０代の方も数人いるが、８割以上が２０代から４０代の方々であり、このような方たちに参画いただいて議論を深めたところである。

（C委員）

第一次計画の時にはエコビレッジという言葉が出てきて、今回はSDGsという言葉が出てきて、次から次へと新しい言葉が用いられているが、これについて市民としては全く実感が湧かない。南砺市に住んでいて良かったとか、そういうことを実感できるような市になったらいいと思う。

最終的に一流の田舎を目指すとあるが、一流の田舎とは何か。福野では農業をやっている人がほとんどおらず、田舎暮らしをしている人が南砺市でどれだけいるのかと思うと、しっくりこない。「まちづくりを自分ごととし」とあるが、裏を返せばまちづくりを人ごとのように感じている人が多いというように聞こえるが、それも疑問である。市としてどこを目指しているのかということが、はっきりしない、上滑りな感じが自分の中である。もっと具体的に、市民目線でというならば、それが実感できるような、地に足のついたような文言があるといい。

（田中市長）

エコビレッジ、SDGsという言葉が分かりづらいと言われた。それはそのとおりだと思うが、新しい言葉を無理やりはめ込んでいるわけではない。今、南砺市の大きな課題というのは、環境や人口の問題、文化をどう継承するか、祭りを続けていくにはどうすべきか、色々とある。この課題というのは、日本全体の課題であり、世界全体の課題でもある。企業や地域社会、国も含めてこのSDGsを進めていこうという流れの中で、南砺市が今まで１０年近くやってきたエコビレッジ構想というものにSDGsと同じ方向性が見いだされているということを国に認めていただいたという経緯もある。私たちが今悩んでいることには日本全体、世界全体での課題が反映されており、世界が課題解決のために決めたゴールに合致する形で定めたのがSDGsである。また、そういったまちをつくるための、一つの私たちの未来の予想図・目標値がこのなかに定められている。それに向って、私たちはこの地域づくりに取り組んでいかなければならない。

SDGsとはなにかということも含めてこれから市民の方と一緒に我々も勉強していく。田舎であるということを私たちは逆に誇りに思って、一流の田舎を目指すという目標を掲げていく。それがこういった５万人を切る地方都市で、私たちが一つの目標・モデルを作るまでの一番いいキーワードではないかと考えている。人が集まりみんなで助け合って、都会よりも多様性がある、いろんな人がいるということをみんなで認め合えるような地域、人と人がお互いに支え会うという地域づくりのため、高齢化社会や小さな子供たちに対する地域での取り組みを表現する言葉の一つとして「一流の田舎」という言葉を選ばせてもらった。違和感のある方も多いと思うが、是非ご理解をいただきたいということで、思いを伝えさせてもらった。

（C委員）

一流の田舎という言葉に対して、このパブリックコメントの中に地域愛という言葉があるが、地域という言葉はかなり漠然とした広い意味の言葉だと思う。地域というのは顔が見える人と限定されると思う。田舎という言葉に比べていい言葉だと思うが、その方が分かりやすいと思う。

（田中市長）

今、課題を解決する時には地域で解決するものだと思う。暮らしの中で最も大事なコミュニティは「顔が見える範囲」の地域であるし、もう少し大きな範囲で見ると、「地域内循環」という意味では富山県全体が一つの地域とも言える。これは言葉の上の問題で、「地域」という言葉には両方の意味があってもいい。ただ地域の顔が見える関係が大事であることを表現するとき、「地域」という言葉がいろいろな意味を持っていて限定されにくいということである。

私はそういった意味で「田舎」という言葉が適していると思う。一流の田舎、もしくは都会に負けないような田舎であること、逆にいうと都会よりもレベルの高いところに田舎というものがあるということを示していきたいと考えている。都会と田舎のどちらが上か下かだけではなく、互いが支えあって共生する社会を作りたいという願いもある。「都会」との対比という意味では「地方」、「地域」、「田舎」といった表現があると思うが、私たちはその中でも「田舎」がしっくりくると思っている。

（C委員）

暮らしやすさを実感できるような目標が設定されたら良いと思う。今から年をとると、やること全てが億劫になる。役所に相談してスムーズになんでもできるといいが、ゴミの問題一つにしても電話をあちこちに回されてスムーズにできない。実際にできるかどうかはわからないにしても、一人一人が暮らしやすさを実感できるような指針・目標になれば良いと思う。

（田中市長）

言われる通りで、本当に言葉が足りないが、電話対応などの行政サービスの向上という分かりやすい暮らしやすさというものもあるし、地域のなかでもっと協力しあうということもある。丁度今、住民自治と団体自治のあり方も少し４月から変わってきているが、そういった目標を立てていかなければいけないと思う。

（D委員）

目指すべきまちの姿に「誰もが地域に居場所があり」と記載されているが、これは「居場所がない」と感じている方がたくさんいるという実態調査や市民アンケートの結果があってこうなったのか。

またキャッチコピーについて、この中に「小規模多機能自治の推進」と出てくる。先程次々と新しい言葉が出てくるという指摘もあったが、小規模多機能という言葉については、私たちは既に聞き慣れている。しかし、総合計画に上げる時は、「課題解決型自治振興会」という言葉が目標に入るのであって、「小規模多機能」は「やるべきこと」の方に入るのではないか。

（竹中課長）

まず、１点目の「誰もが地域に居場所があり」という箇所についてだが、こちらの方は市民アンケート、或いは市民会議等から、「自分が地域で活躍できる場があるかどうか」という点で不安が見て取れた。そのため、それぞれ互いを認めあい、活躍できる場というものが今後のまちづくりにとって非常に大切な要素ではないかということで、今回「目指すべきまちの姿」ということで記載させていただいた。

２点目の小規模多機能の推進という部分についてだが、言われるとおりであるので、こちらの方は今のご指摘も踏まえて、「目標」ではなく「手段、やるべきこと」として改めて整理していく。

（D委員）

やはり「居場所があり」という箇所が、居場所がない人がそんなにいるのかと思うと寂しい気がする。「子供の居場所づくり」や「高齢者の居場所づくり」といった言葉が今流行りだが、本当にその言葉でいいのか。とても不幸せな方がたくさんいるように感じて、あまり適当ではないと思う。

（会長）

他にご意見はないか。

（E委員）

行政が計画を作るとなったら、このような計画になるのだろう。第一次総合計画というのは行政の方が主体となって作成されたが、今回は皆さん方の協力を仰ぎながら市民と協働で作りあげたいというお話であった。

確かにこの字面などを考えてみるとこのようにまとまるのだろうと思うが、住民は顔形が違うように、それぞれの年代であったり、あるいは男女の差、それから置かれている地域の環境、その人が暮らしている立場によっていろいろな意見がある。それを総じて私はサイレントマジョリティというふうに思っている。そういう声を上手に捉えていかないと、また「行政が勝手に作っただけのものに、私たちはあわせていけばいい」というところに行き着くと思う。今から計画を作る上で一番大事なのはその声なき声、サイレントマジョリティの意見をどのように吸い上げるかではないかと思う。これは今後どうするかを今すぐ返事いただかなくても結構だが、どうやってそれを確保していくかということを考えていってもらいたい。

それともう一つ、南砺市の人口は今５万を切って将来２万や３万になり、またこれから１０年２０年後にはAIの時代が来るとも言われている。そうなると、人間がいらなくなる。そうした時に、果たして本当にそれだけの人口を抱えるだけのキャパシティが南砺市に、あるいは富山にあるのか。南砺市にそれがなくても富山市にそれがあったら南砺市に住まずに富山に住むということになるのではないか。適正人口規模は人口動態から見ていくと将来的にこうなるということを言っているが、そうではなくて、既存の産業があって、AIが導入されて、そうした時代に今の若い人たちが中高年になっても、老人・年金生活者になっても、生活していけるのか。どういう検討をすればいいのか私にも分からないが、そういう点を考えないと、大きな議論がなかなかできないのではないか。

人口減少についても、南砺市の産業や文化も含めたこういうところに魅力があるので、皆さん暮らしてみませんかということで対策しなければならない。普通のやり方だったら、隣のまちから人間を引っ張ってきたり、どこかから引っ張ってきたりという話になるが、日本全国全体が人口減少しているのだから、どこかから引っ張ってくるやり方では先がないと思う。

（竹中課長）

一点目のサイレントマジョリティをどう拾い上げていくかということについてだが、非常に難しい問題である。私たちも今すぐこういった声に対して、どのように開いていけばいいのか、具体的な方策はなかなか答えられない。ただこうした場、あるいは地域づくり協議会での活動、あるいはさまざまなコミュニティでの活動、そういった中から少しずつ声を拾い上げていき、行政の方から耳を傾けていく努力、姿勢は今後重要になっていくと考えている。

二点目の、AI時代が到来することによる南砺市の未来、キャパシティの問題については私のみが南砺市の未来を語る立場ではないが、今日本全体が人口減少社会に向かっており、南砺市だけでなく全ての地方がそういう方向に向かっている。そうした中で、今ある産業、農林水産業も含めて、そういったことが後継者問題も含めて、持続可能社会でありつづけられるのか、というところを今まさに問われていると感じている。したがって、他の市町村から移住・転入者を引っ張り合うということではなくて、都会に住んでいる人と田舎に住んでいる人が互いに興味をもってもらう。例えば、都会の人でもお祭りの時には南砺に行ってお祭りに参加してみたいな、協力してみたいなと、そういう言葉が広がることを目指す。確かに人口は減るかもしれないが、そういった人と人、都会とのつながりによって、地域が今の暮らしが少しでも維持し、持続可能な社会になれば、良いと思う。

２０年３０年先には、先ほど言われたように、ある意味住居の集中化という面も出てくるようなことも否定できない。いずれにせよ、今我々が暮らしているこの南砺の日常というものを、できるかぎり未来に残していきたい。そういう思いで今回のビジョンを作成しているので、この点ご理解いただきたい。

（会長）

それでは、その他のほうに移る。第一番目、庁舎統合に伴う各課の移転スケジュールについて、説明をお願いする。

○その他

**（１）庁舎統合に伴う各課の移転スケジュールについて**

（石崎課長）

石﨑行革・施設管理課長から資料に基づき説明

（会長）

二番目。市が事務局を担っている各種団体事務の方向性について、説明をお願いする。

**（２）市が事務局を担っている各種団体事務の方向性について**

（石崎課長）

石﨑行革・施設管理課長から資料に基づき説明

（会長）

ご意見お願いします。

（F委員）

福野行政センターのなんと菊まつり実行委員会、友好交流協会についてだが、福野の菊まつりは当時の町長が菊花会にお願いして始まった祭りである。福野地域友好交流協会にしても、中札内と姉妹都市提携を結んだときに、市側から住民に持ちかけて始まった。発端は市の方が市民に持ちかけて始まったもので、市から市民の方に持ちかけておいて、市民の側でできないのならばやめるというのはあまりにも理不尽な考えだと思う。市が菊まつりはいままでよくやってきたからもう継続しなくてもいいのではないかと、そういう考えならばそれはそれで良いと思うが、それで地域の人たちが納得できるのか。

（石崎課長）

仰るとおりだと思う。今までこの団体事務は行政の方から声をかけて行ってきた。しかしながら、現状からいうと行政センターの人員も限られてくるというのは事実である。団体事務をなくしたいというのは私たちの思いではないが、今後継続していくためにはやはり地域の方で主体的に担って頂く方がいないと、いずれにしても存続できない。

現実問題として、この二つの団体については福野地域の中でも特に移行に難航・苦労している団体と聞いている。どうやってこの団体を地域に残していくか、こういったことについて現在交渉を進めているので、もうしばらく時間をいただきたい。

（F委員）

よろしくお願いしたい。特に菊については若い人が入ってこないので、事務局を担う人が見つかるよう市にお願いしたい。

（田中市長）

市でも各地域に村やまちが地域活性化のために始まったイベントがあると聞いている。いろいろな地域で今のような話をしながら移管を進めているが、特に菊まつりについては難しいと思っている。ここで言っていいかわからないが、移管に時間がかかるものもある。何年か後に誰かにシフトできるように、もしくは菊作りを行っている方が熱意をもって今年だけでなく来年のものも作っていけるようにしなければならない。時間的なことも考えながら、是非存続していってもらうために最善を尽くすというのが我々の仕事だと思っている。

そのために、資料の中で、行政センターの地域振興の職員を課で集めて、一つの地域振興室とする。例えばそういう点を、機構改革の中で考えていかなければならない。とにかく、団体事務をなくすことなく、どうにかして移行の道をつけていくことを前提としていく。

（会長）

まだ質問もあると思うが、次の令和二年度からの組織機構改革について説明をいただく。

**（３）令和２年度からの組織機構改革について**

（上口市長政策部長）

上口市長政策部長から資料に基づき説明

（会長）

ご質問がないようなので、質疑応答を終える。

○閉会

○副会長挨拶

　　　堀元副会長

　　　事務局（センター長）から閉会の宣言をする。